

大阪・関西万博におけるパビリオン等地元出展に関する
有識者懇話会 第1回 議事概要（メモ）

■日 時：2019年12月21日（土） 14時00分～15時30分

■場 所：大阪府庁咲洲庁舎50階「迎賓会議室」

■出席委員等：※敬称略。五十音順。所属、職名は開催当時。

（委員）

東 博暢（株式会社日本総合研究所リサーチ・コンサルティング部門 プリンシパル）

大西 流星（株式会社ジャニーズ事務所所属なにわ男子メンバー）

佐久間 洋司（大阪大学学生人工知能研究会／AIR 代表）

澤田 裕二（UG WORK 合同会社代表／プロデューサー）

鈴木 裕子（株式会社 Office musubi 代表取締役）

巽 樹理（追手門学院大学社会学部 准教授）

遠山 正彌（地方独立行政法人大阪府立病院機構理事長）

Nigel D. R. Simpson（公益財団法人大阪観光局大阪観光アドバイザー）

西澤 良記（公立大学法人大阪理事長）

橋爪 紳也（大阪府立大学研究推進機構特別教授、大阪府立大学観光産業戦略研究所長）

（特別アドバイザー）

高橋 政代（株式会社ビジョンケア代表取締役社長）

つくくみ（音楽家、総合エンターテインメントプロデューサー）※テレビ電話にて参加

【発言要旨】

《吉村大阪府知事》

皆さんこんにちは。大阪府知事吉村です。皆さんにおかれましては、本当にお忙しい中、この大阪の地元パビリオンの有識者懇話会の委員と、そして特別アドバイザーにご就任いただきまして、本当にありがとうございます。

万博はオリンピックと違いまして、国の行事ということで、政府館というのが当然できますが、それとは別に、この地元大阪として、大阪館、地元館、地元のパビリオンというのを、松井市長とそれから民間の皆さんと一緒に作っていきたいと思います。

なので、大阪ならではのものをぜひ作りたと思っています。もうワクワクして突き抜けた感のあるものをぜひ、作っていきたいと思います。

テーマは、「いのち輝く未来社会のデザイン」ということで、一言で言えば、僕はいのちと、健康、未来、このあたりがキーワードになるのかなという風に思っています。

この、いのち、健康、未来というのをキーワードにして、多くの方に何度も来たいと思ってもらえるような、大阪らしいパビリオンをぜひ作っていきたいと思います。そして、またそれを次の世代にも残していけるようにしていきたいと思っています。

今回、この有識者会議を構成しまして、若いメンバーの皆さんにもたくさん入っていただきまし

た。僕自身もよく若いと言われますが、僕より若い方が4名入っていらっしゃるということで、どんどん気兼ねなく言いたい意見をどんどん出してもらって、そして、次の世代も含めた素晴らしい大阪のパビリオンを、どこのパビリオンにも負けない大阪館というのを、ぜひ作っていきたくと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

それから、特別アドバイザーということで、ハワイからつんくみさんと、それから高橋先生と、本当にお力添えをいただきまして、今日は、いらっしゃいませんけど山中先生にもご就任をいただきまして本当にありがとうございます。

また、そういったパビリオンを作ってまいりたいと思いますので、アドバイスの方よろしく願います。

《松井大阪市長》

大阪市長の松井です。本日は、この大阪・関西万博における地元パビリオンの有識者懇話会に、本当に最高の皆さんに、委員に就任をいただいたと思っています。そして、特別アドバイザーには、つんくみさんと、高橋先生にもご就任をいただいて、本当に感謝をいたしております。

今、吉村知事からもお話ありましたが、万博において、様々なパビリオンができると思いますが、やはり、地元大阪・関西として、我々のパビリオンに対しての期待というものは、非常に大きなものがあると思っていますし、2015年に、万博をやりたいということで手を挙げまして、そのときも、まだ国も経済界の皆さん方からも、それはどうなるかわからない、箸にも棒にも掛からないのではないの、というような状況でしたけども、僕は、そのときから世界の課題を解決する、そして、世界中の皆さんが参加して幸せになれる、そういう万博をやりたいと、勝手に旗を振っておりました。

2016年、17年、18年と、いよいよBIE各国への誘致活動においても、僕も吉村知事も誘致活動の中で、世界中の皆さんを幸せにすると、僕は、風呂敷を広げるだけ広げてまいりました。

ただ、何の根拠もなくそういうことを言っていたのではなくて、まさに日本は、また大阪・関西は、ライフサイエンス、この懇話会の特別アドバイザーでは、山中先生も参加していただいており、そういう素晴らしい、新しい研究の成果によって、世界中の皆さんを幸せにできる。そして、一人ひとりを健康にできる機能を、この長寿社会において機能を何とか強化、維持できる、そういうものが必ず生み出すことができると、こう信じております。

ぜひ皆さんのこれまでのご経験をもとに、素晴らしい大阪・関西パビリオンの基となる、核となるものを作り上げていただきたいと思いますので、よろしく願いをいたします。

～事務局から委員の紹介（欠席の森下委員のビデオメッセージを放映）

《森下委員（ビデオメッセージ）》

大阪大学の森下です。今日は、欠席して大変申し訳ありません。私も考えている10歳若返りのプロジェクトに関しまして、少しご紹介したいと思います。

「大阪健康館」という概念ですけれども、ぜひ積極的に生きがいが増えるような、人生100年時代を迎えて、大阪から日本、そして世界を幸せにする、元気にするようなプロジェクト、パビリオンができるといいんじゃないかという風に思っています。例えば、パビリオンの中に入って、自分の色々な年齢を測定しながら、人体の不思議を勉強していく、そして自分が若返りたいところを、

アプリで、サプリメントがいいのか、運動がいいのか、あるいは食事がいいのか、そういうことを学びそして自分の行動変容に繋げ、大阪を長寿のまちに変えていく、そんなパビリオンができたなら一番いいじゃないかなという風に思っています。

資金的な面も大変ですけれども、ふるさと納税であったり、企業のふるさと納税、色んな形で府民・市民の方々の協力を得て、ぜひ、レガシーとして残れるような「10歳若返りパビリオン」そうしたものができると構想が、望ましいのではないかとこの風に思っています。

ぜひ、次回以降、さらに詳細を検討して、私も委員会の中で色々、委員の方々のご意見をお伺いしたいという風に思っております。

本日、欠席ということで大変申し訳ありませんけれども、ビデオメッセージという形で、熱い想いを伝えたいと思います。ぜひ、今後ともよろしく願いいたします。

～事務局から特別アドバイザーの紹介（つんく♂特別アドバイザーからのコメント後に、欠席の山中特別アドバイザーのビデオメッセージを放映）

《つんく♂特別アドバイザー》

背景がハワイらしくなくてすみません。よろしくお願いいたします。笑顔いっぱいになりたいと思います。

《山中特別アドバイザー（ビデオメッセージ）》

京都大学IPS細胞研究所所長の山中伸弥です。この度は、特別アドバイザーを仰せつかり、大変光栄です。本日は、他の用務のため参加できず、とても残念です。

今回の万博は、「いのち輝く未来社会のデザイン」がテーマです。少子高齢化などの課題先進国である我が国が、課題を克服する姿を世界に見せる絶好のチャンスです。色々なアイデアや最新技術を持ち寄り、大阪ならではのモノ作り、食文化、そして笑いでいっぱいのパビリオンになることを期待しています。

IPS細胞研究も、2025年には今よりもっと進展していると思います。万博を一つの目標として頑張ります。委員の皆様、活発なご議論をどうぞよろしくお願いいたします。

～事務局からオブザーバー及び理事者の紹介。

座長（西澤委員）から副座長（橋爪委員）を指名。

事務局から資料4について説明。

《西澤座長》

ただいまのご説明で、もし何かご質問等ございましたら、挙手願えればと思います。

中々、スムーズに説明していただいたので、容量がすごく多かったのですが、なかなか整理がつかないと思いますけれども、よろしいでしょうか。また、追々ご質問いただければという風に思いますが、よろしいですか。じゃあそういうことで、そういう風にさせていただこうと思います。

つんく♂アドバイザー様いかがでございましょう。ありがとうございます。

それでは、次に2025年大阪・関西万博につきまして、地元大阪が果たすべき役割、あるいは、大阪として何を見せるのかという、パビリオン展示あるいはイベントを含めまして、委員の皆様方

からご意見を伺えればと思います。

できれば、お1人3分程度でコメントをいただければ、後でまたフリーディスカッションできるようにさせていただきたいという風に思っております。

では、順次私の方からご指名させていただきます。3分程度ということでお話をいただければとお願いを申し上げます。五十音順でお願いしたいと思います。

《東委員》

東です。五十音順だと毎回、私からですけども、今回、課題解決型ということで三つの視点があると思っています。人類の課題、街の課題、この星（惑星）の課題ですね。

人に関しては、まさに今、再生医療が進んでいると。街の課題に関しては、クリーンテックとかですね、再生可能エネルギーというところで進んでいると。

一方で、星の課題というのは、イーロン・マスクやジェフ・ベゾスなど色んなところでやっていて、月の水を持ち帰るとか、人類を地球外へ送ろうとかが本当にビジネスとして考えられていると、これは結構、三点的な視点で、生命がかなり広い定義で捉えられてきているかなと思います。

そのときに、ちょうど25年となると、おそらくリアルとサイバーが完全に融合した後の世界が来るだろうと。そうすると我々、今、未来の話もしていますが、かなり四次元的に捉える必要があるかなと思っています。

最近、皆さんメディアで見られたと思いますけれども、美空ひばりさんのAIのライブ。あれは、我々、ネットワーク空間にログインして、それが、ずっとネットワーク空間で生き続けるっていう世界が来ると。そうすると、故人、亡くなった方々と、今、生きている方々との対話があると。例えば、NHKで見ましたけれども、美空ひばりさんの映像を見てお年寄りの方が涙して聞いていると、私の叔母は認知ですけども、認知症の方も昔の曲はフルで覚えている。こういう新しいインタラクティブが、その四次元空間で起こるっていう、これがまさに始まったなっていうのが、今回の令和だと思っています。

そういう意味では、完全にその世界が、サイバーとリアルが融合したときの我々の生命の定義という倫理的な議論もG20とかでされていますけども、そこを新しくメッセージとして、そういう世界が来たぞと、我々人類、次のステージが来たぞということが、新しくインパクトを出せるような展示をすれば、次の万博に対してのリレーができるかなと思っています。

《大西委員》

この会議の中では、一番年下となると思うのですけれども、今日、学校の終業式を終えてやってきました18歳の高校3年生大西流星です。

僕は、今アイドル活動をしているのですけれども、なにわ男子というグループで、「なにわ」と付いているからには、万博も、もっともっと、若い世代として支えていきたいというか、もっともっと、色んな同世代の方たちに知っていただけるように、パビリオンでも、そういうステージであったりとか、イベントであったりとか、そういうので、まずは、そのイベントを見るために足を運びたいなと思っていただいて、それから来てみたら「意外とこういうものもあるのか」といって、「いのち」のことであったりとか、そういうのにも触れるきっかけにもなるのではと思っていて、僕のメンバーの中で、今、バーチャルアイドルという新しい、ジャニーズ初ですけども、2次元と3次元を繋ぐような新しいことをやっているメンバーがいて、曲も作って、色んなところで、2

次元の中でアイドルとして生きているのですが、そういう新しいアイドルのあり方であったり、エンターテインメントのあり方も、この万博を通して、日本の良さといいますか、「アイドル界もこんなにも燃えているぞ」というところも若者としては、もっと世界に伝えていけたらなと思うのはあります。

初めての会議で、めちゃめちゃ緊張していますけれども、若いなりに色々な意見も言っていたらなと思っているので、よろしくお願いします。

《佐久間委員》

こういった場でしたら23歳の僕が一番若いかと思っていたら、18歳の大西さんがいらして衝撃を受けています。それに関連して少し思うことがありまして、「いのち輝く」と言うときに、これが単純に健康長寿だと言ってしまうと、誰にとって嬉しいのかという問題があると思っています。つまり極論を言うと、10歳若返り館などは個人的にはとても興味があるのですが、僕の歳で10歳若返ったら中学1年生になるパビリオンになるんですよね。大西さんに至ってはおそらく小学2年生になるので、こう考えると、万博で健康や予防を中心にすえたパビリオンに若者が来るのかという難しいかもしれないと感じています。

個人的に思うのは、例えば、前回の大阪万博で作られた遊園地が未だにエキスポシティという形で残っているように、このようなエンターテインメントはとても重要だと思っています。直接的なエンタメ要素がない万博は少し高尚すぎるというか、一番うがった言い方をすると、若者にとっては半年間で造った突貫工事の博物館のように映りかねない。

日本の大阪らしい取り組みと、さらにエンタメの部分から一步踏み込んで、最先端のトレンドも組み込むことが必要で、先ほどの東さんや大西さんの話とも近いのですが、僕自身がやっている研究がバーチャルY o u T u b e rを題材にもしているのです、興味があることを一つご紹介したいと思います。

若者やZ世代だとか、そしてさらに下の大西さんの世代というときには、ハンドルネームを使いこなして、アイコンを自分自身だとみなして、たくさんアカウントを使い分けてペルソナを当たり前に出しているのは当たり前で、さらにその次はアバターになるということは、無理のない流れだと思います。

そこで紹介したいのが、バーチャルなキャラクターを身にまとして演じるバーチャルY o u T u b e rや、先ほどお話のあったバーチャルに活動するジャニーズのメンバーの皆さんです。彼らはエンタメからバーチャルな世界でのコミュニケーションを促進していると思います。

例えば、パビリオンの一つとしてできるかなというのが、ただコミュニケーションをするだけのスペースがあって、そこに入った瞬間に、2025年ごろにはVRゴーグルよりカッコいいものだと思うのですが、そのバーチャルな空間に入るだけというコンテンツです。

例えばこの委員会の会場に私たちはいるのですが、この会場に世界中の人がバーチャルに来られて、これが先ほどおっしゃっていたサイバーフィジカルに同一な空間であると。つまり、VRでただ会場の様子を配信するというだけでは意味がなくて、つまりこの会場がVRで配信されていて、世界中が僕らの会議にアクセスできてもつまらないと思うのですよ。

その他にも娯楽がいっぱいある中でわざわざ来てもらうためには、例えばアメリカ人のジェイソンさんという人がいたとして、この委員会にアクセスして座っていたら、彼がアメリカでも座っていて机を揺らしたら、この委員会にある机も揺れて発言できる。僕たちにはフィジカルにも

それが感じられて、ひいてはバーチャルに参加している人とリアルに参加している人の区別がつかないとか、ARを少し拡大解釈したような話ができるといいと思います。

年齢や性別、容姿を超えて、好きな姿を身にまとして、そしてリアルとバーチャルな空間が融合した会場に、ログインしてただコミュニケーションするという。そういうのって、すごく単純なようで、例えばVRのゲームで一番プレイされているのが結局ゲームよりもVRチャットなのではないかといったことを考えると見方が変わるかもしれません。

何をするアプリかという、ただ喋るだけ、友達と自分が自由な姿でただお喋りするだけ。剣で切り付けて楽しいとかではなくて、最後はコミュニケーションが残っているのだというときに、これは結構面白いパビリオンになるのではないかと考えています。これはサブテーマと先ほどおっしゃっていた「いのちに力を与える」ですとか、いのちを輝かせるという文脈において、こういう僕たちが今まで持っていた性別や容姿とか、区別・差別を克服できるという魅力があります。

自動音声翻訳などが発展していれば、国や人種も越えた全く新しい世界が、私という個人があり、そして個人と個人がみんなでお会いできる新しい空間を提示できると思います。そういった話を今はVTuberがエンタメから引っ張っているのですが、2025年にはみんな当たり前前にそういう世界観が持てるとしたらカッコいいなと思っています。

《澤田委員》

私は、博覧会をつくる専門家ですけども、万博は現在岐路に立っていて、今のお話なんか面白いなと思って聞いていたのですが、現代は情報が瞬時に伝わって一般化してしまうので、今年に新しいものも来年には普及して当たり前になっているんですね。万博は、計画に時間がかかるので、新しいものも計画している間に一般の社会にできちゃう。

VRもあつという間にゲームに使われてしまうし、かつては、そういうものの普及に時間がかかったので、博覧会に行かなければできない体験というのは残っていたんですね。現在、そういうもの無くなっているの、さあこれをどうするだろうかっていう問題です。

もう一つは、エンターテイメントで、隣には巨大なUSJもありますし、70年万博には、都市の中にそれほどエンターテイメントは無かったですが、今はものすごくいっぱいある。そういったエンターテイメントとどうやって戦いながら価値を出すのか。そこでびっくりして人の気持ちが動かなければ意味がないので、そこをどうするんだろうかっていう問題ですね。エンターテイメントの日常化と情報がものすごく早く行き来し、情報鮮度がなくて万博をやる。この二つが、万博が今岐路に立っている世界中の問題だと思いますね。

元々は、公衆の教育っていうのが、BIEがうたっている万博の目的で、もう一つは、産業振興ですね。その二つでどうやって人類の課題を解決して行くのが万博の構造なのですが、今回の大阪府市の参加でいうと、一番私が気になったのは、「大阪ならでは」というのは、どう構成するのだろうか。今出たお話は、「大阪ならでは」でないですね。

それらは、世界共通の話なのです。これを「大阪ならでは」においた瞬間に、ぐっと話が狭隘化してっちゃうわけですね。なおかつ当然、他にテーマ館もあり政府館もあり各国のパビリオンもあり、その中で「大阪ならでは」という風に考えると、非常にローカルなところに行ってしまうわけで、その辺をどうするのが、この議論の中のすごく重要なことで、IT系で面白い方に行くと、今の話は面白くていいのだと思うのですが、それは「大阪ならでは」なんだろうという視点で

見ると、そうではないだろうなっていうところをどう解決するのが、一つの大きなポイントです。

もう一つは、与件の中で大阪・関西と書いてあるのですが、これは、大阪のパビリオンなのか、関西のパビリオンなのか、はっきりさせて議論した方がいいと思います。そうじゃないと、ある人は関西エリアで議論し、ある人は大阪エリアで議論して、違う話を議論することになるので、両方だったら両方でもいいですけども、それをきちっと整理して議論していくことが、次の計画に入っていくときは、すごく重要だと思います。

それから参加の形態ですね。参加の方法を展示だけだと考えていいとは思いますが、今回の「いのち」の問題を考えていくと、展示だけでは無理だと思いますね。いかに多くの市民を巻き込むことがすごく重要なポイントになるので、広報がものすごく重要になってくるのです。加えて体感的理解や共感も大事ですから、そこでライブに出会うイベントもすごく重要です。大阪府・大阪市ですから、スペシャルデーが実施できるので、かなりのイベント施設を利用することができます。つまり、展示、イベントそれから広報、営業、運営の全て一体化したプログラムとして考えることが大切で、展示だけを考えていくと非常に効果の薄いものになると思います。

最後に、国際博覧会条約事務局総会の94年決議で、人類社会の課題解決型の万博になったのですが、それによって暗い万博になりやすくなっています。松井市長もミラノ万博をご覧になったと思いますが、テーマ館は食糧の課題を散々展示しているのですが、出てきた人は暗くなっちゃうのですよ。「人類の未来は暗いな」みたいな話になっちゃうのですが、やっぱり万博は、どっか楽観主義で、未来に対するエネルギーをそれぞれにチャージしていく必要がある訳で、その辺が、やや未来に向かう祝祭としてのありようというのを、しっかり作っていくということが大事だと思います。

やっぱり、大阪周辺にお住まいの人が多く見にいっちゃうこともありますけども、パビリオンを出た後に、「大阪に生まれて良かったな」とか、「大阪に住んでいて良かったな」とか、他の地域の人でも「大阪にぜひとも住んでみたいな」とか、なんかそういうようなことになることが、私は大阪らしさというか、大阪府市が出すパビリオンとしてすごくいいのではないかと思います。海外の人が来ても、大阪に住んでみたいな、いいなって思ってくれるのがすごくいいのではないかな。

そうすると、People's Living Labとの関係もありますけども、横浜アートトリエンナーレで、関帝廟をそのままホテルにしたアートプロジェクトがあったのですが、例えば、大阪ならではの最先端のマンションみたいなのを作って、夜は泊まれるけど、昼間はいろんな人が入って展示になっていて、大阪が目指す最先端の居住空間・都市であるっていうものをやると、展示パビリオンであり、なおかつ提案空間であり、リアルであり、それが色んなものと繋がっているっていうようなものが、出来上がったらすごく大阪らしいし、面白いのではないかなって、何か皆さんの話を聞いていると思います。

《鈴木委員》

鈴木裕子です。若い方もいれば、先輩方もいる。非常に意見交換これから含めて楽しみにしておりますよろしくお願いします。

私は、愛知県で生まれてアメリカで暮らして、東京で暮らして5年前に大阪に来ました。大阪に来てみて「なんだこの街は」ということで惚れ込みまして、それは、やっぱり人がこの街の宝だなと思っているのですが、今、年間4回ニューヨークと行き来していて、世界中、色んな所に行きながら、日本の食の素晴らしさを発信するっていう仕事をしているのですが、こんな街は今のところ

まだ見たことがない。

ですけれども、海外にまだその良さが全然伝わってなくて、Netflix や著名フードジャーナリスト等、海外のメディア関係者とも仕事をすることが多いので、常に、彼らにどうやったら大阪の魅力が伝わるかということを考えながら活動しています。

海外でも、大阪は「食だよ」っていうのはなんとなく認識されているのですが、たこ焼きお好み焼き止まりでそれ以上が伝わっていないという状況で大半8割9割ぐらいの人がそれだけしか知らない。私としたらイライラするので、「いや違う」と、でも今、大阪の問題って違う「じゃあ何」という置き換えの言葉が明確になってないところが課題で、私自身は、今自分なりに思っていることを「違おうだよ」と伝えながら、これだと理解が深まる、魅力が伝わると実験しながら発信しています。そういうことを日々しているので、今回、万博っていうのは、もう大きなチャンスであり、私自身にとっても大阪に会社を移し、自宅を移しまで惚れ込んで、海外拠点の大阪発信に熱を注いできましたので、「ラストチャンスだ」くらいに捉えこういう場で何か面としてオフィシャルに発信できるのをすごく楽しみにしています。具体的にこれというのはまだないですが、大阪の宝は「人」であることは絶対的で、食は人を繋ぐものであって、ただ欠けているものと言えば、やっぱり外の目での編集力が欠けているのではないかなと思っています。大阪は内なる幸福度は非常に高いとっていて、おいしいし、人もコミュニケーション力も高いし、でも、それを武器にして全然売り出していない。これ、売り出せる武器なのに、その辺りを何か発信できる企画なり、コンテンツが用意できたらいいなと考えています。

観光地とか場所として引き付けられるものは、1度行けば、もういいかなということはあっても、「人」と繋がればリピートに繋がるので、そこを取り組むべきだと。人で繋いでいく、その出会いの場をどれだけこの万博を通して作れるかということも、1つカギになってくると思っています。

万博をどう売るかっていうことも大事だと思うのですが、いわゆるフーディーズは、食で圧倒的に魅力的な企画があると飛行機に乗って世界中移動してでも行きます。

魅力的なコンテンツを万博の中に用意して、「それすごく行きたい！予約してでも。来年スケジュール空けとくよ」と言わせて「で、会場はどこ？あ、万博会場ね」という入り口も必要ではないかと。万博には興味ないけれども、食は興味あるという人をいかに引っ張り込めるか、少し視点を変えた仕掛けも必要ではないかと思っています。

《つんく♂特別アドバイザー》

同意。大阪に限らず日本全体の魅力がまだまだ伝わっていないですよ。

《異委員》

異ですよろしくお願ひします。私も、大阪市に生まれまして育ちも大阪で。今後も大阪から出て行く予定は一切ございませんので、大阪を愛している1人として、この会議に参加させていただいたらなという風に思っております。

今回の万博のテーマが、「いのち輝く未来社会のデザイン」という非常に壮大なテーマでありますが、私が注目させてもらったのは、この資料にも書いています通り、7ページに持続可能な開発目標、17掲げられていると思うのですが、特に注目させてもらったのが、この3番の「すべての人に健康と福祉」そして4番の「質の高い教育をみんなに」この2つに注目させていただきました。ここでどの層をターゲットにするか、ここでは、みんなっていう風になっているのですけ

れど、やっぱりある程度、対象者を絞る方が、今後の議論がされやすいのかなという風に思っております。

今、皆さんもご存知の通り2020年はオリンピック・パラリンピックが東京でございます。その翌年ですね、まだまだ認知度は低いですが、関西ワールドマスタースズってというのが、30歳以上の成人の方の4年に1回のオリンピックですね、これ実はアジアで初、日本、それも関西であるということで、オリンピックを「見る」スポーツから「する」スポーツっていう風に移行していくということで注目されています。

しかし、このワールドマスタースズってというのは、どちらかというと、ちょっと競技性が高い、健康的で比較的体の動く人が対象というか参加する傾向にあるという風に思います。

この流れで、2025年に大阪万博が開催されるってことなのですが、この2025年ってというのは、団塊の世代がちょうど後期高齢に入るタイミングでありますので、後期高齢者、すなわち75歳ですね、社会保障が急増するってということで、やはり健康を真剣に自分の事として捉えて考えるタイミングでは、抜群にいいタイミングなのかなという風に私は思っております。

先ほど3と4を挙げましたが、私は、高齢者のやはり健康っていうのにウェットをおいてですね、取り組めたらいいかなという風に思っております。

本日は、具体的な提案まではちょっと持ってはないですが、個人的にはこの万博、関西がそういった高齢者の起爆剤となるような健康寿命の延伸と言われていますが、その一手手前の運動習慣の獲得、これが非常に大事なのです。

高齢者教育、この言葉が正しいかわからないですが、健康に対する正しい知識の習得であったりとか、体の正しい動かし方とか、それに加えて大阪なので、やっぱり笑いとか楽しさっていうのを付け加えないといけないですね。

今現在、私も高齢者のシンクロナイズドスイミングのチームのヘッドコーチをしています。多分想像に苦しいと思うのですが、平均年齢72歳なので、それこそ本当にマイナス10歳に見えます。水中に入ると、膝とか腰の負担も軽減されますし、そこで生きがい・健康だけではなかなかこういう長期の実施は難しいですね。

そこに、生きがいとか楽しさとかやりがいを加えると、やはり運動も長期の実施に繋がっていきますので、そういったことも取り組めたらいいかなという風に思います。そうするためには、最先端技術のバーチャル参加とか、私個人的にはこれすごく期待しているのですが、あと、スポーツの最先端は、今大学にあるという風に思っていますので、産学官の連携でしっかり横串を刺して、取り組めたらいいかなという風に思います。

最後に、欲を申しますと、万博期間が終わったらパビリオンが取り壊されて何もなくなるっていうのはちょっと悲しいという風に思いますので、期間終了後に何を残すか、万博で何をレガシーとして残すかっていうこの議論も、しっかり活発にできたらいいかなという風に思っております。

《遠山委員》

遠山でございます。ちょうど前回の万博のときは体験しておりますので、今度が2度目の体験ということになるのですが、異先生が言われた後期高齢者に、そのときに入る一番迷惑な団塊の世代の代表でもございます。そうなってくると、まずやっぱり私どもいろんな大学におるときは、研究だけで来たわけですが、自分の職に就いてみると、やっぱり医療の大事さというのを非常に身に染みて感じるようになりました。

特に、まず1つは、自分の少し認知のことも含めて、また私の母親が90なんぼで、これも認知で行ったのですけども、非常に大変なのですね。本人はそうでもないでしょうけど、家族がこれまた大変ですね。そうなってくると、やっぱりいかにして健康な生活を長く送れるかということが、非常に大事なことで、いかにサポート体制を作ってあげるかというのは、大事になると思います。

今度、うちの精神医療センターでは、実は、今認知症の診断というのは中々長時間かかったり、主観に頼るとかあったのですけども、日本人の方が見つけてこられた物質が、実はドイツで治験をやると、MCIというアルツハイマーの早期に血液が出てくるということがあって、それでその先生なんかを迎えながら、すでに、この1月から日本で治験をして血液を採るだけで、すぐに認知症が早期かどうかかわかると、それからもう1つは、これもその先生の仕事であったので、実はこの物質、光を当てると非常に活性化するのです。特殊な光なんですけど、そうすると、外から光を当てただけで、軽い認知症と言われた人は、解決するやないかと。

この2つを認知症の研究テーマのメインにおいて、要するに診断も治療もやれますよということで、これは、4月から治療の方がスタートいたしますけど、こういう形でやはり認知症に対して新しいブレイクスルーを開いていければいいなど。

特に思いますのは、診断だけで、あんた「ぼけてますよ」って言われて、じゃあどうしたらいいのということが出るので、やっぱり治療で、非侵襲性という、これに非常に私どもとしては、期待と若干の自信を持って与えたいという風に思っています。

特に、もう1つ大事なことは環境で、実はこれも精神医療センター等々で話をしているところですけども、いわゆるいくつかの住宅を扱う会社がありますけれども、そういう会社と今一体となって、やはり薬をデリバリーしてもらうのにどうしたらいいのか、そして診断をどうしたらいいのか、介護をどうしたらいいのか、ベッドをどうしたらいいのか、家の仕組みをどうしたらいいのか、というところ、未来型の介護のあり方についての提案を、今、していただいている所です。

こういう形で、25年までにいけるかあれですけど、認知症に対する1つのちょっと明るい未来を、光を当てられたらいいなというのが一つです。

もう1つは、我々のところでは実は、今、少子化と言われてはいますが、非常に問題なのは、AYA（あや）世代なのですね。例えば、がんになった女の子はもう妊娠できないのか。ちょっと違うのですよね。その間、ちゃんと、とっとけばいい。

女の子だけかっていうとそうじゃなくて、男の子なんかは精巣のガンになってしまうと困ってしまふ。精子を保存しておけば、そういうことでAYA世代の病気を持つ若い人たちに対する、生殖医療をどうしようと、これは、実はそのために急性期総合医療センターで公的にやるべきだということで、生殖センターを作ったのですけど、そういうやはり少子化を迎えたときに、特に子どもが欲しいけどできない、そういうときにどうしたらいいのかという、1つは、大きな問題があるのです。人工授精、そういうところをやっぱり提案していけることも大事なことになるんじゃないかという風に思っています。

それから、もう1つは、やっぱり病院のあり方として、実は病院に行くと暗いなあとか、子ども連れてきたら「あんた病気うつされんで」ということになる訳ですけども、それも正しいのです。感染症の中でも、未来型の病院はみんな、例えば、子どもも連れて来られて、ロボットの遠隔手術の練習もできて、そして、例えば、手術はこんなんするんやなというのは、ロボットでもやれますし、AIでもやるし、そういうバーチャルな治療というのも経験させてみたいと、そうすれば、みんな来て、家族で医療を楽しめるという。

あの未来型の病院ができれば、先ほど全部潰してしまったら惜しいというのと同じで、レガシーとして残せるかもしれません。同時に、もう1つやっぱりあのこれ大事なことは、再生医療をどうしていくかという臓器の問題、これは各先生方が、山中さんうちの澤さんもそうですけど、やってもらふことで、これはやっぱり外せない再生医療の課題というのは大変重要な課題になってくると思います。

このあたりが、やはり非常に我々としてみたら、もし貢献できるのであれば、何らかの形で貢献したいなど。特に認知症の場合、私の場合も差し迫っておりますので、いわゆる研究者の職員の名前まで忘れて、あいつ誰やったかなと言われて怒られるときもあるのですけども、そういうことが少しでも防げればいいかと思っておりますので、そういう面もご協力できれば幸いです。

《Simpson 委員》

関西、特に大阪人はよく「知らんけど」と、語尾に使いますよね。このような場で使うことはありませんが、私は、いかげんなフレーズじゃなくて「良い加減」の言葉と理解しています。知らんけど。つまり、「おもてなし」と同じような大阪らしいスローガンが、必要ではないか感じております。

「なんでやねん」、あるいはSDGsの観点から考えると「もったいない」など、色々考え議論する必要はあるのではないかと。

あと、もしご指摘させていただくのであれば2点あるかな。1つ目は、ウェルネスというテーマが非常に重視されているのに、あんまりメンタルヘルスに触れていないという印象を受けています。特に、イギリス人としては、最近、ウィリアム皇太子とハリー皇太子がうたっているからこそ、気になっていただけですが。ていうか、最近の英国の政治などを見ているだけで恥ずかしい。

中々、難しいところとわかりますが、2つ目に関しては、何十年前から外国人のコミュニティの中では、大阪人は日本のイタリア人や、ラテン系や、とずっと言われてきました。大阪は別の国や、別の惑星やというぐらいの調子で、まさにそうだと思いますが、自分は半分ポルトガル人ですけど、大阪の良さは、やっぱり鈴木さんと同じように大阪人だと思います。人柄、人情、飴をくばるおばあちゃん、ただ住んでみないとわからないもんやわ。

あと、五感で体験するデスティネーションだと肌で実感しています。それをどうパビリオンの方で表現するのかというのが、非常に重要な課題というかポイントだと考えております。

《橋爪委員》

橋爪でございます。よろしくお願ひいたします。3点ほど申し上げたい。

1点目としましては、堺屋先生が提唱された「イベント・オリエンテッド・ポリシー」ということを考えていただければと思います。要は館に入る前と終わった後で、それまで思っていた常識がガラッと覆る。だからこそ我々は面白いと思ひ、驚く。

最初に予定調和で、こんなものを見せませう。入ってその通りでしたという展示であれば、面白い訳がない。なので、我々は大阪の出展を経て、多くの人の意識を変えることが求められます。よほどユニークな演出をしなければいけないと思ひます。

例えば、地方自治体の出展で言うと、今日の資料で抜けているのが幾つかある。スペインのサラゴサ博アラゴン州のパビリオンでは、アラゴン州の風土を見せていた。上海世界博覧会では、上海市が環境共生住宅のモデル住宅を作って、色んな企業が、新しい環境に配慮した生活空間の

展示をしていました。ただ、それらの展示に驚きはなかった。

スペインのサラゴサ博で、私は日本館を澤田さんと一緒に展示に関与させていただいた。ここではメインショーのあと、スクリーンが割れて正面に本物の水の滝がダンと落ちて驚くという演出があった。入館者に全く意識を替えてもらうような、展示を考えていかないとあかんというのが1点目です。

2点目としては、これは2025の大阪・関西万博の検討に参加する中でも申し上げてまいりましたが、「いのち」というのが人間だけでいいのか、という点です。動物の「いのち」も大事なのではないか。植物とか、昆虫とか、いろんな「いのち」とともに、我々の「いのち」が生かされているという視点は、おそらく大事だろうと、さらに機械にも我々は生命を見出す。

日本人の独特の感覚で、猿の中にも人間的なものがあり、人間の中にも猿的なものがあるというのが、京都大学の霊長類学の元々の原点であります。我々も、様々な人間以外のものにも「いのち」があり、そこに人間的なものを見いだせる。だから、美空ひばりさんの復活映像を見て、なんか涙が出るというのは、バーチャルな存在に対して、「いのち」を見出していると思うのですね。

要は、人中心だけれども、私たちはいろんな違う物とともに生きているのだということ、考えの中心に置くことがあって良い。ダイバーシティであり多様性を認めあう社会こそが大阪であるというイメージである。ミナミで生まれ育ちましたので、ごちゃごちゃ色んな人が交じり合って住んでいるのが、大阪という都市の根幹にある特性であると思っています。世界中どこから来ても大阪に住んだら、気に入ってもらったら、すぐに大阪人って言うていいみたいな雰囲気がある。

多様なものを受け入れてく力というのが、大阪らしさの根源だと私は確信しています。リアル・バーチャル本当に融合するのが、当たり前になっている中で、逆にほんまにリアルとはなんぞやってことを考えるっていう視点から、「いのち」の多様性を考えるという視点が求められる。

大阪の万博でいうと、70年万博の太陽の塔の中は「生命の樹」があった。90年の花博会場にも、「いのちの塔」が建っていた。大阪も50年前から「いのち」のことを考えてきたと言っていいと思いますが、時代とともに表象の仕方というか、メッセージの出し方はそれぞれ変わってきている。

世界にも「生命の樹」みたいな展開は至るところにあります。たとえばフロリダのディズニーワールドのアニマルキングダムに「ツリー・オブ・ライフ」というタワーがある。何百種類かの動物の彫刻があって、それで世界が出来ているっていう風なシンボリックな生命樹です。ただ1つだけ実際にいない動物がいて、それはミッキーマウスが隠れていると、我々はそのリアルな動物で固まった象徴の中に、作り物のミッキーを探して遊ぶわけですが、「多くの命が合わさって、我々はその中で生きている」ということを体感できる。私は、2025年における最新の「生命樹」を象徴的に見せるような発想があれば大阪らしいと考えています。

3つ目ですけども、「おもてなし」に対抗する大阪らしいキーワードが要るかと思います。たとえば大阪で言う「おせっかい」という概念が肯定される。頼まれてもいないのに、何かしてあげようか、初めて会ったのに最近どうしてるのかという親しみをもってコミュニケーションをはかる力がある。

あるいは万博誘致のときでもアピールしましたが、「三方良し」という言葉。Win-Win-Winの関係であることを主張しました。大阪言葉の体系では、他人のことを「自分」というこ

とができる。私も自分やし、あなたも自分である。「I & I」の精神がある。一人称、二人称が曖昧で、最初から他者と自分とは一緒だという感覚がある。だからこそ、「三方良し」という概念が生きてくる。

もう1つは「やってみなはれ」これは、色んな分野において色んな訳され方をしていますが、これは世界に通じる考え方だと思います。この「おせっかい」「三方良し」「やってみなはれ」等々の、大阪から発することができる価値観を、大阪館で展開できればと思います。

《つんく♂特別アドバイザー》

鉱山、鉱物にも命があるんやろうしね。

《西澤座長》

ちょっと時間が長引いているのですが、少しだけせつかくの機会なので、私も一言だけお話ししたいと思います。

サブテーマは「いのちを救う」。何度も出てきていますが、健康寿命を伸ばすとかいろんな意味を含みますし、「いのちに力を与える」というのは、AIとかロボットとか、そういったものを活用しながら教育あるいは、ビジネスへの活用というようなことも大いにやっていくと。それから「いのちを繋ぐ」これらが僕はものすごくキーやと思うのですけれども、異文化理解をしていくとか、新たな技術革新を創出していくとか、何かそういった大きい意味の理念が隠れているのかなという風に思っております。

この理念っていうのは、もう非常に近未来的なITとかAIとかを用いて、種々の仕掛けをして今まで、今お話かなりたくさんありましたけれども、非常に楽しくって、そして夢があって且つ参加型のパビリオン、そういったものにできればなという風に思います。

実は、私の所属しております大阪府立大学と大阪市立大学の統合予定の新大学のキャンパスというのが、大阪城の東部地区に想定されております。この大阪城東部地区での新たなまち作りのコンセプトというのが、少し出来上がってきておまして、次世代のキャンパスシティというのが中心になりながら、核になりながら、多様な人々が文化、科学あるいはビジネス、そういったもので融合するような場になる。

そして、近未来的なスマートシティの実装フィールドになるという、そういう街にしたいという風に考えられております。これ、非常に万博の理念と創造性が高いのではないかなという風に思っておりまして、万博での多くの技術あるいは考え方、そういったものを取り入れて、万博後のレガシーとしての街となることを、今期待しているところであります。

今回のパビリオンにつきましては、このような観点からも、21世紀の後半に向けて、人類の生活をより豊かにして、そして持続可能性のある社会を築けるようなそういった契機になるようなパビリオンにしたいなという風に思います。

これから皆様方と一緒に議論していただいて、そういったことを作り上げていただければなという風に思っております。

つんく♂アドバイザーからご意見いただきますでしょうか。

《つんく♂特別アドバイザー》

こんにちは。有識者の偉い方々が皆さん大阪弁で嬉しいです。

30年前の花博のときは、近畿大学の学生で花の入れ替えのバイトを深夜にやっていました。時給が1,000円の大台に乗った深夜バイトでした。そんなつくみです。

今回は特別アドバイザーという大役。とても光栄に思っています。

2025年までずっとあつという間ですが、私にできる限りのことをさせていただきます。

大阪・関西が、そして日本が世界の皆様に向けて発信すべきことはたくさんあると思いますので、みんなで丸となって成功させましょう。そして、大阪・関西の底力をみんなに知っていただきましょう。

ただし、一番は、開催期間の6ヶ月こそあつという間だと思っています。なので、奥が深くてもいいんですが、最新式でもいいんですが、見た感じ、聞いた感じ、難しいのは嫌だなど。時代に敏感すぎると、2025年には古くなる。

若者の横文字がいっぱい出ると、パニックを起こす大人の皆さんも多いかと思うんですが、その感じ、逆にとても大事だと思っています。世間の皆さんがきっとそうだと思うので、そう考えて、ポイントは、1 老いも若きも楽しめる（特に子どもさん）。2 かつこいいでも敷居が高くない（かつこよくないと絶対に駄目）。3 ユーモアはあってもベタにならない（笑顔は大切ですが）。4 外国人にも難しくない仕組み（チケットの自動販売機とか難しいの嫌だ。説明なくてもできるような）。これは、かつこいいという言葉とは直結しないかもですが、僕はディズニーランドでいう It's a small world が好きでして、いつ行っても15分ぐらいで入れるってのも含めて大好きだし、一番ディズニーワールドを感じるんですね。象徴的なのに安心感があって、背伸びしていないし、ほっこりする。ああいう感じの寄り添った感覚を表現したい。

昭和や平成だけを振り返って懐かしがっても、それだけだと仕方がないし、未来を想像しすぎて仕方がないし、歴史を見れば、奈良も京都もあって、オシャレな神戸もある。

江戸時代の相場の中心であった大阪から今発信すべきこと。そこに来て触れたり、感じたり、体験できるような、そんなパビリオン。アナログ感覚を大事にしたいと思います。子どもでも大人でも、何かに触れる。体験するって、いつまでも思い出に残るものですから。

100年後の子どもらが来ても楽しめるようなパビリオン（例えば、べったん、ビー玉はもちろんなんですが、今40年前のパックマンのテーブルゲームを今の子どもがやっても、それはそれで面白いと感じると思う。）とにかく体験、体感型をおすすめします。

さっきの話と反対で恐縮なんですけど、これはやったらあかんことなんか知れんけど、たこ焼き焼くって話かな。だんじりの上に乗る？金に触る？ということでもまとめると、歴史に触れる（古墳や神社仏閣も含む）。グルメに触れる（健康と美味しいの両立）。文化に触れる（未来も感じる～初めてスマホに触ったときのような導入で十分～）。これこそ、今さらというか、手前味噌なんですけど、やはり音楽ありき、ミニステージもあって、現場を紹介するスタッフが定刻になれば、歌って踊る6ヶ月限定のグループなどを作る（ジャニーズ出て）。リアルとバーチャルの融合もありなんですけど、時代を追っかけるのは6ヶ月の限界も少々感じます（最初に触れるきっかけにもなるのはありかも）。

でも、ここまで書いておきながら、最終的にみんなで覚悟を持って欲張らず、グルメだけに絞るとか、音楽だけに絞るとか、何かに拘っただけでも、例えば大阪の個人を含む中小零細企業を含めて、知恵を絞って丸となれば素晴らしいものを作り上げ、大阪・関西らしさを発揮できるのではないかと思います。

例えば、グルメだけでもIT、オートメーション、味、医療（介護含む）アレルギー対応など、

健康（長生き）、エンタメ性、ファッション、音楽、VR（未来）などなど、いろんな分野を巻き込めるような感じがします。

半年なんで欲張らない方がいいかなって思います。大阪だけでなく、関西としての表現の場所となるといいですね。

《西澤座長》

高橋アドバイザーお願いします。

《高橋特別アドバイザー》

皆様の意見が面白くて、ちょっとメモしようと思ってたくさんいろんなアイデアを書き止めさせていただいたのですが、私自身、万博全体の協会の方の理事もさせていただきまして、一つ提案というか色々しているのは、神戸アイセンターっていうのを作ってまして、真のインクルーシブですね、そういう社会を実現したいと思って作ったものなのですが、万博っていう期間と規模であれば、次の新しい社会を作ってみせられるんじゃないかと、それはテクノロジーの次ではなくて社会科学的な次の社会ですね、そういうのをちょうど見せる規模と期間としてはいいんじゃないかなという風に思っています。

「健康っていう言葉はあんまり使わないで」って皆さんにも言っているのですが、病院において、遺伝子診断なんかしていますと、正常の人っていうのはいないのです実は。だけでも、障がいの方と健康な人がいるようなあたかも幻想の中で、今の社会があるっていう、そういう分断があるっていうこと。

デバイスなどテクノロジーで障がいは、克服できる時代になってきていますので、この万博で完全にインクルーシブな世界をみせる、そう考えますと、大阪の地っていうのは、すごいなって、先ほど言われて何でも受け入れる、そういうところであるので、障がい者の方がデバイスで全部解決して、会場をたくさん歩いているのを見せられるのではないかと思っています。

それともう一つ、AIロボットを使って研究なんかしていますと、未来社会ってやっぱり金融資本主義でいくと、ディストピアしか見えてこないところがあります。

今、金融社会の基本資本主義の各国の分断っていうのが、もう見えています。その価値観をひっくり返さないと、必ずディストピアになるなっていう実感があって、価値観を変えましょうよっていう話をして、経営者の方なんか熱心に聞いて下さる。

それも「大阪ってすごいなと」お話聞いていて思ったのですが、もともとお金をいっぱい持っている人が偉いっていう感覚じゃないですよ。安いこと、これなんぼで買ったっていうのが基礎にありますし、私ずっと学生時代を大阪生まれで大阪にいましたけど、笑かしてくれない男性なんか価値ないという、そういうとこですよ。だからそういう価値観、笑いを通貨にするとかですね、そういう新しい社会を見せられるんじゃないかなあと思って、まさに大阪にすごく期待しているところです。

《西澤座長》

大体意見をいただいたんですけど。知事・市長から何かご感想がもしあればお願いいたします。

《松井市長》

興味深いご意見がたくさんありまして、特に、東さん、佐久間さんの4次元。

リアルとバーチャルの融合と、それがちょっともう申し訳ないけど、僕の想像がね、頭の中にスカッと映ってこないのよ。それ1回見せてほしい今度。何か映像みたいに「こんなんですよ」と。皆さんの言うのがすごく一生懸命に想像力を働かしてるけどそれと、僕の考えているのと、マッチしているのか、用語も含めてわからんところがいっぱいあって、僕は、特に同年代でもアナログの部分が多すぎてね、ちょっとわからんところがあって、すごく興味があるのだけど、ぜひ1回次回あたりで、「こんなんですよ」って見せてもらいたいなと。これまず1つお願いをしたいと思います。

あとは、やっぱり健康になるというところについては、これはもう人類全ての人の願いだと思いますので、そこはリアルに行きたいなと思っているし、それをリアルにするためにも、レガシーとして、これ残す方向を考えないかなということが、今、今日僕が感じたところです。

《つんく♂特別アドバイザー》

わからんままでええようにも思いますけど、時代が追いついてきますよ。

《吉村知事》

本当に皆さんの色々な意見をお聞きして、これはおそらくまとまらないだろうなと思いました。でも、僕が今感じているのは、色々な今枠組みがあるわけですが、枠組みを超えていく新たな価値観みたいなものをこのパビリオンで生み出していくというのは、非常に重要なのかなという風にも思います。

それから、やはり人間の五感に触れる体験もそうですし、体感、いろんな人間の五感に触れるもの、ワクワクするパビリオン、説教じみたものじゃないものっていうのがやっぱり必要だろうなと思います。

テーマが「いのち」ですから、「いのち」について、そういうワクワクするパビリオンだけど、「いのち」についてやっぱりこう考えるというか、もう人間誰も死ぬわけですけども、やっぱり楽しんで棺桶に入るときに良かったなと思って、僕も死にたいと思っていますから、「いのち」を楽しむというか、楽しめるといふか、そういうパビリオンにしたいなと思っています。

これから皆さんの色々な、様々な意見も踏まえて、大阪らしくて色々な枠組みを超えて、ワクワクするパビリオンをぜひ今日話聞いて、作っていきなという思いも新たにしました。

それから、それを作るだけじゃなくて、今後レガシーとして残していく。この夢洲の地に残していつ、次の世代、その次の世代にもそれを使ってもらう。そういったものをぜひ実現したいなと思いました。

《西澤座長》

委員の皆様方から、ご意見聞いたのですがけれども、もうあまり時間はないですが、何か言い残したこと、あるいは他の委員に対してのご意見、あるいはコメント何かもしございましたら委員の中でご意見いただければという風に思いますが、いかがでしょうか。

《佐久間委員》

まず、松井市長から次回プレゼンをというお言葉をいただいて、大変ありがたく思っております。また、つんく♂さんに質問というか感想があって、つんく♂さんから、若者らしい横文字が並んでいて～というお話が少しあったと思ったのですが、これは僕のことかなと思いつつ、実は「それをつんく♂さんがおっしゃるのか」という話もあります。

つんく♂さんが、ちょうど昨日発表されて、界限では話題になったのですが、バーチャル YouTuber の大きなイベントのテーマソングをつんく♂さん自ら作曲されて、しかもそれを「歌ってみた」という若者が自分たちで声を当てて歌を配信できる音源として配布しているという、先端のところに取り組みられていますよね。

バーチャル YouTuber のキャラクターを身にまとってという文化、歌ってみたと両方掛け合わせて自由に使用していい音源を配信したりと、まさにつんく♂さんがやられている中で、横文字を並べているのは僕だけではなくて、この委員会でも追いかけてもいいことなのかなという風にも思っています。

《つんく♂特別アドバイザー》

わっ、バレタ。はい。

やっぱりその辺は、上手に大人の方を巻き込んでいきたいなど。5年後にうまく的を絞りつつ、中国、韓国から見られても恥ずかしくない水準で、大人も子どももその場で楽しめるものをさりげなく仕込めたら、勝ちだと思っています。

こっそり研究しましょう、コソコソ。で、一気に巻き込みましょう。

《東委員》

これせつかく大阪なので、ある種コミュニケーションの一つの手として、私も大阪人なので、よく大阪人のいい言葉で「これ要するになんやねん」という話があると思うのですね。ある程度こういうコンセプトを考えると、結構どんどん難しくなりがちなのですが、改めて、ちょっとそれ要するに「何なんだ」とか、「知らんけど」という言葉で、ある程度ちょっとわかりやすく一般化するっていうのは、意外と関西人得意というか、いらちなので、ぱっと見てわかるのかな、いろんな人がすぐに見たらこうなのだっていう、それを作れたら勝ちだと思えますから、一旦そこに立ち戻って、できたら全員関西弁で喋ればいいと思うのですが、関西の方がそういう形で進めていくと、意外と一般化できるかなと思います。

《高橋特別アドバイザー》

私、多分委員会には出ないので、あんまり参加できないので。ちょっと言い忘れたのが1つ、ちょっとまた真面目な話になりますが、再生医療っていうのを先ほど言っていました。

1つやっぱり当たり前なのですが、再生医療もテーマの一つで、私、特に目の再生医療は、比較的やりやすいので5年後をターゲットに、万博に来る外国人の方たちを治療できるようにと準備をしています。ですから、例えば、今度やる視細胞の移植なんかは、回復するまでに半年ぐらいかかるのですね。ですからちょうど来てもらって、滞在していただいても退屈しない万博というのをお願いしたいのと、さっきレガシーっていう言葉があって思い出したのですが、Google、Appleが入ってきて、もう医療は変わります。病院だけじゃなくて、生活に医療が入って

いくので、そういう新しい医療の形を残せるようなところを作っていただければなど、いう風に思っています。

《西澤座長》

ありがとうございます。よろしいでしょうか。

せっかくでございますので、本日オブザーバーでご参加いただいております皆様方から、もし何かコメントございましたらお願いできますでしょうか。

《武田経済産業省商務・サービスグループ博覧会推進室長》

経済産業省の武田でございます。失礼します。

一言で申し上げますと、非常に危機感を覚えた。危機感を覚えたというのは、実は、我々も先ほどお話が出ていましたけれども、万博全体の計画もさることながら、日本政府館というのも準備を、議論の端緒についたばかりでございますけれども、万博会場の中では大阪府・市さんがこのおやりになるパビリオンとそんなに多分遠くない位置のところに位置する訳でございますので、こんなに大阪府・市さんが、立派な方をお集めになって、こんなに立派な意見が出ているパビリオンはさぞ面白くなるだろうなと思ひ、いや、これはちょっと政府館の検討もちょっと真面目にやって、やっているんですけども、もっとまじめにいや、アイデアはとりませんが、やっていかなきゃいけないなと思った次第であります。ありがとうございます。

《西澤座長》

ありがとうございます。

ちょっと過分のお褒めをいただきましたが、そのほかはございませんでしょうか。いいでしょうか。

はい、ありがとうございます。ちょうど時間になったのではないかなという風に思いますけれども、本日は初会合ということでございまして、意見交換を中心に、万博の基本的な部分、大阪として見せるべきものも何か、といったようなことでディスカッションしていただいたという風に思います。

次回の会合では、例えば、これまでの常識にとらわれない、参加体験型のパビリオンなどの出展の絵姿、あるいは、あらゆる人が見てみたい、あるいは体験してみたいと思うような、コンテンツの提案、あるいは、見る人を圧倒するようなエンターテイメント、こういった具体的なイメージとかアイデアをお考えの委員の先生方に対しては、議論を深めるために、次回に、ご議論いただければという風に思います。

次回の会合では、資料の提示でありますとか、あるいはプレゼンテーションを行っていただければなど、いう風に思っております。ご準備いただけるようでしたら、よろしく願い申し上げます。

また、各委員から出されました提案やアイデアによりまして、より磨きをかけて、大阪らしく誰もが楽しめるような内容に仕上げていくために、数々のエンターテインメントを手がけてこられましたつくくみさんの豊富な経験、それから知識、創造力、ぜひお願いしたいという風に思います。よろしく願い申し上げます。

次回の開会日につきましては、改めて、事務局から日程調整させていただきたいという風に

思いますので、そういった形で、日を決めさせていただきたいということで、皆様方のご了解をいただきたいという風に思ってよろしいでしょうか。ありがとうございます。

では、そういう形で次回の日程を決めさせていただきまして、本日の議事につきましては、以上で終了させていただきたいと思います。どうもありがとうございました。